広島大学ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ
――オンラインフランス語講座製作の試みと可能性――

平　手　友　彦
広島大学総合科学部

はじめに

広島大学で2000年11月から始まった「バーチャルユニバーシティ推進事業」のもとで，英語，ドイツ語，フランス語，中国語の各外国語学習用コンテンツの開発が行われてきた。この「バーチャルユニバーシティ推進事業」については，既に広島大学情報メディア教育センターの岩崎克己氏がそのドイツ語部門の『オンラインドイツ語講座』の報告とともに解説を加えられているのでそれを参照していただくことにして[1]，ここでは筆者が中心となって製作したフランス語教材「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」[2]を報告しつつ，オンライン語学教材の可能性について論じてみたい。

1．バーチャルユニバーシティにおける外国語学習

まず最初に「バーチャル」における外国語学習について考えてみよう。

「バーチャル」とは西垣通氏によれば「現実に対立する「虚構」という意味ではなく，たとえ虚構の信号から構成されていても「事実上は現実と同様の効果をもつ」ということ」である[3]。コンピューターテクノロジーに関連づけて定義するならば，「コンピュータが視覚や聴覚や運動感覚に訴える人工的な空間を作り出し，人間があたかもその環境の中にいる感覚で機械と対話できる技術」[4]ということになるだろう。この具体的な成果は「ヘッド・マウンテッド・ディスプレイ」と呼ばれるシステムでよく知られている[5]。ゴーグルのようにして頭にかぶり，手には「データ・グローブ」という電子手袋をはめることで，対象が三次元映像となって現れた世界を眺めながら，自らの手の動きをリアルタイムでその世界に反映させる。今，私たちが問題とするバーチャルユニバーシティについて言えば，そこまで大げさな装置は必要ない。インターネットに接続されたコンピュータの画面とマウスおよびキーボードさえあれば事足りるはずである。実際，筆者はサーバー上にバーチャルユニバーシティを置いた実験システムを見たことがあるが，そのシステムでは登録すると画面上の仮想大学構内に自分の分身が現れ，キーボードとマウスの操作によって現在の学生のように学内をうろうろし，ある時は掲示板で休講情報を得て喜び，ある時はダミーに混じって存在するバーチャルな学友を見つけては語らうといったものであった。しかし，このようなリアルタイムを意識した外形的なバーチャルユニバーシティは何だがオモチャのようなもので，学習そのものとはほとんど無縁であろう[6]。そもそもオンライン教材においてこのようなリアルタイムという同時性は必要不可欠なものなのだろうか。むしろ現在優先されるべきは，ハードが先行したリアルタイムという時間差の問題ではなく，オンラインによる学習を実際の講義と同等，又はそれ以上の効果を引き出すようなソフト，それも単に「ソフト」という言葉で括ることのできない内容の充実したコンテンツの開発にあるのではないだろうか。事実，大学審議会マルチメディア教育部会は，既に1998年４月（第10回）の時点で，力点をシンクロナイス（同時性）からアシンクロナイス（経時・異時性）に移動し，今後の重要な問題としてアシ

ンクロナイスでシンメトリー（双方向）な授業の単位認定をどのように行うかということを議論し始めた[7]。ここからも現在求められるコンテンツ製作では，学習の評価や質問等のレスポンスの双方向的な問題を効率よく機能的に行うことが重要なのであって，厳密な同時性は必要ないということを読みとることができる。とりわけ「同化」adaptation を第一義的な目的とする外国語学習では，学習者が自らのペースに合わせて反復練習することで効果のあがる教材がまず第一に求められなければならない。従って，ここで言うバーチャルな教材とはインターネット上でWEB ブラウザを利用し，いつでもどこからでも，そして何度もアクセスできる教材を意味するものではあるが，必ずしも同時性にこだわるものではない。

他方で，バーチャルは外国語学習として利用されることで効果を発揮する側面を持つとも考えられる。既に外国語学習の教科書にビデオ教材が数多く導入されていることからも分かるように，対象となる外国語を母語とする人やその地域の映像と音声を活用することで，外国語習得のために現地まで足を伸ばさなくとも，ある一定の臨場感を得ながら学習を進めて行くことができるからだ。バーチャルには「現実と同様の効果をもつ」世界を再現する可能性があることを考えると，ビデオ教材に代表される外国語学習教材と結びつけたくなるが，しかしこれには注意を要するだろう。様々な場面変化をビデオ映像で用意し，学習者の操作がこの場面展開に反映される仮想空間を創出したとしても，これを突き詰めて行けばやがてバーチャルのもつ本質的で解決不能な問題，即ち「モデル化の恣意性」[8]の問題に突き当たるからである。これは自明的とも言えるが，バーチャルには対象とする世界を完璧に再現はできないということである。従って，例えば「仮想」フランス留学では，選択肢はいくらかあるようには思えるが，結局は「仮想」留学者が選ばされた道を学習者は後追うことになる。パリのシャルル・ド・ゴール空港に降り立った留学生とともに切符を購入して RER（Réseau Express Régional 首都圏高速鉄道網）でパリ市内に入り，ホテルの宿泊やレストランの食事ではそれなりの苦労をしながらも，やがては生活にも慣れ，時には盗難にも遭い，時には恋愛も体験するが，そこに現れた世界は製作者の視点から再構成されたものでしかない。場面を限定すればするほど，そこから抜け落ちたものは多くなる。これを補完するために，多くの場合では展開の連続性から切り離されたヴァリエーションとして別の形で提示していくことになるだろう（例えば関連表現の練習，関連場面での応答練習等）。以上述べたようなことを考慮すれば，ビデオ教材製作上の重要な点は，この製作者の「視点」と同時に，その「選択性」であるということになる。このことについてはオンラインのビデオ教材においても同じである。

2．フランス語教材製作のねらい

そこで私たちは「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」の製作にあたって，いささか大げさではあるが，神の視点からではなく「私」の目から教材を製作すること，従来の権威主義的な会話スキットの連続性から敢えてはずれることでよりオリジナルなオンライン教材の製作を試みようとした。具体的には第一に，教材を「ヒロシマ」という場所からの発信型とする。第二に，登場人物として設定したフランス人を介してヒロシマとフランスを繋ぐ。第三に，できればこれに時間と記憶の問題を絡めてみる。以上の点を考慮して教材製作に取りかかった場合，直ちに想起されたのはマルグリット・デュラス Marguerite Duras 脚本，アラン・レネ Alain Resnais 監督の傑作『二十四時間の情事』*Hiroshima mon amour*（1959年，脚本タイトルは『わが愛，ヒロシマ』）であった。この映画をオーバーラップさせた形で，映画に描かれた時からほ

ぼ50年後となる現在のヒロシマを舞台にしてフランス語教材を製作し，これをインターネットで配信することができれば面白いではないか。映画を見ていなければ意味がないと言われればそれまでだが，この教材と映画を連動させ，フランス語でヒロシマの過去と現在，そしてそこにいた人と生きる人が何を見，何を考えたかを捉えることができれば，科白の聞き取りが容易になるといった単なる映画による語学補語教材以上の学習効果が期待できる。勿論，エマニュエル・リヴァ Emmanuelle Riva と岡田英次扮するフランス人女性と日本人男性を使うところまではできるはずもない。それならば，長くヒロシマに住むフランス人男性をモデルに立て，彼の現在と過去を描きながらヒロシマとフランスを駆けめぐる形で構想を練ればよい。この製作の手始めに『二十四時間の情事』のロケ地となった広島市内を調査し，作品の中のカットやカメラの動きを分析し，他方で映画の科白に用いられたフランス語とできるだけ重ねて脚本を書き進めていった。ところが言わずもなが，この企画を進めて行く上で様々な問題が生じた。まず第一に，教材を利用する学習者である。ほとんどの場合フランス語は大学で初めて学習を始める「第二外国語」であり，「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」利用者の多くを広島大学の学生に想定していることを考え合わせれば，このフランス語教材の対象者は入門・初級レベルに設定せねばならない。そうであるなら，このレベルでの映画科白の聞き取りは容易ではない。第二は第一の裏返しの意味であるが，製作する側にとってもこの条件下ではストーリーの「モデル化」が極めて限定され，本来の意図と遠く離れる可能性が強い。第三は致命的な問題である。モデルとなるフランス人男性の過去を描くためにはフランス（パリ）ロケが必要であるのだが，今回の「バーチャルユニバーシティ推進事業」で与えられた予算枠に海外渡航費用（旅費）はない。これら何れの問題の解決もつかず，結局当初の企画は変更を余儀なくされ，次のように落ち着いた。第一に，物語性を放棄してフランス語の入門的な教材製作を優先させること（フランス語の綴り字と発音，フランス語初級文法の解説）。第二に，フランス人男性による教材は総てインタビュー形式として，簡単な初級会話で使用する例文からやや複雑な文までのヴァリエーションを確立すること。第三に，その際には広島を紹介できるようなシチュエーションを利用すること。第四は第二に関連するが，インタビューの質問事項の関連性を断絶して（つまりコンテクストを無くして），学習者の高度な聴取力を試すこと[9]。結果的に，当初の企画は全てフランス人男性に対するインタビューという形に変わってしまったのである。幻の企画の段階にまで遡って長々と述べ立てたのは，そこに実現しなかったことへの無念さが無いと言えば嘘になるが，条件次第ではこのようなオリジナルな教材開発も可能であり，これが通常の講義以上に魅力ある外国語学習に繋がる可能性を秘めていることを示したかったからである。

3．オンラインフランス語教材製作の実際

A．オンラインフランス語教材

以上述べた経緯によって，このオンラインフランス語教材は入門・初級レベル（週２コマ×30週，計120時間）学習者を想定して製作された。従って，このレベルの学習に必要最低限と考えられる次のような発音，文法，聞き取り等の教科書的な基本構成を保持している。

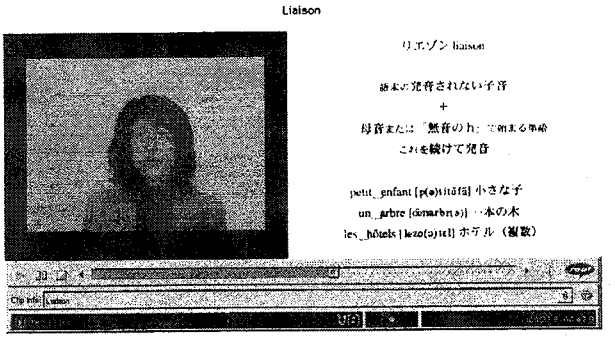
1）フランス語の綴り字と発音
2）フランス語文法解説と４択練習問題
3）聞き取り１　アンテルビュー

4）聞き取り２　ディクテ
5）ロワジール・パリとクロスワードパズル

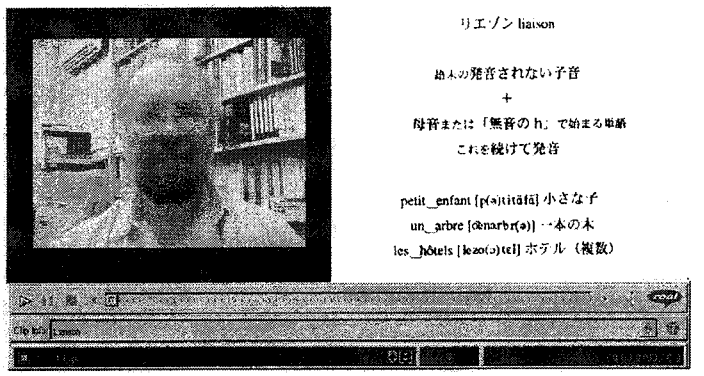
これらいずれの教材も台本作成から，撮影と編集，そして後述するインターネット上への配信まで全て著者が中心になって手作業で行った[10]。
それでは具体的にそれぞれの内容を見ていこう。

1）フランス語の綴り字と発音（全24ユニット）

この教材の各ユニットは，フランス語の綴り字と発音の関係を学習するために，日本人教員による文字説明付き動画解説（図１）と，フランス人教員による単語例の動画発音（図２）から構成されている。フランス人による発音例を音声だけでなく動画としたのは，口の動きを示すことで発音発声上の助けとなると考えたからである。



日本人教員による動画・文字説明付き解説（図１）



フランス人教員による単語例の発音（図２）

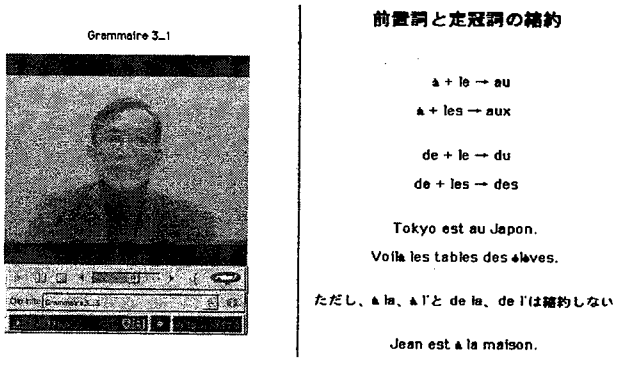
導入の「まず始めに」でフランス語は綴り字と発音の対応関係が規則的で例外が（英語などに比べ）ごく僅かであることを示した後，以下のように「単母音字」，「複母音字」，「鼻母音」，「子音字」，「複子音字」，更にフランス語に特徴的な「リエゾン」，「アンシェヌマン」，「エリズィオン」の順で各ユニットの解説が続く。

「単母音字」　　a, i, o;　u;　y;　e
「複母音字」　　ai, ei;　au, eau;　ou;　eu, œu;　oi
「鼻母音」　　an, am, en, em;　in, im;　on, om;　un, um
「子音字」　　c;　g;　s;　h;　r
「複子音字」　　ch, ph, th, gn
「リエゾン」
「アンシェヌマン」
「エリズィオン」

図からも分かるように，左に動画による説明，右に文字解説の二画面構成を取って，学習者の眼に慣れた教室講義での教員と黒板に見立てた。撮影したヴィデオ画像は Adobe Premier を使用して編集し，RealPlayer で再生可能な Real 形式の動画ファイルとして生成した。この動画ファイルに文字解説を連動させるためには，XLM で作られた言語 SMIL (Synchronized Multimedia Integrated Language) を用いた。SMIL は複数の動画ファイルや音声ファイル，そして画像ファイルの連動を可能とするマルチメディアコンテンツ制御に適した言語である。文字色を変えて強調した文字解説の画像ファイルをあらかじめ Photoshop で用意しておき，この SMIL を使って Real 再生画面に埋め込む形で連動させた。

2）フランス語文法解説と 4 択練習問題（5 課23ユニット）

この教材はフランス語初級文法の動画付き解説と，これに関連する自動添削問題の二部から構成されるが，現在はフランス語の初級文法習得に必要な全10課のうち 5 課までが完成している。これらは全て日本人教員の解説により（図 3），次のような文法内容から構成される。

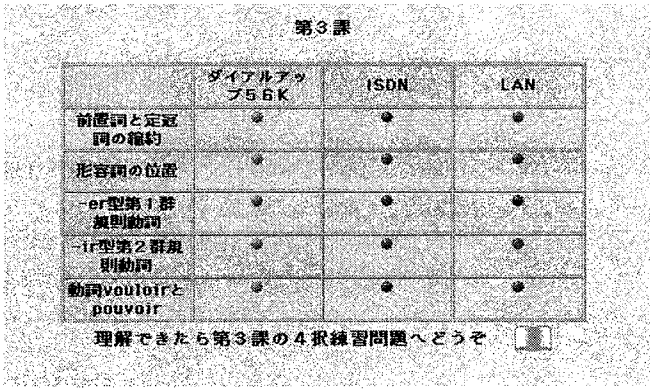


日本人教員による動画・文字説明付き解説（図 3）

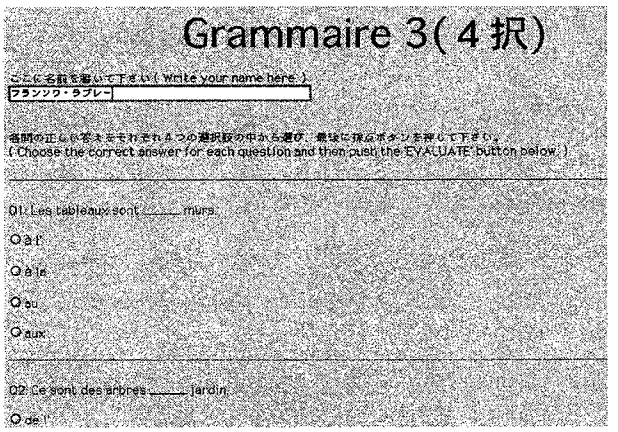
第 1 課　　名詞の性と数，主語人称代名詞，動詞 être，不定冠詞と定冠詞
第 2 課　　形容詞の性と数，部分冠詞，動詞 avoir，否定文，疑問文
第 3 課　　前置詞と定冠詞の縮約，形容詞の位置，-er 型第 1 群規則動詞，-ir 型第 2 群規則動詞，動詞 vouloir と pouvoir
第 4 課　　指示形容詞，所有形容詞，疑問形容詞，人称代名詞の強勢形
第 5 課　　名詞の複数形，形容詞の女性形，動詞aller と venir，中性代名詞 y，不定代名詞on

ここでの画面構成は先の「1）フランス語の綴り字と発音」とは若干異なり，左右を1対1で配分したフレームの左にReal形式の動画ファイルがポップアップ形式で再生され，右にはHTMLで書かれた文字解説が提示される。このような画面形式に変更した理由は，文法解説は発音解説とは異なり，文字伝達部分が例文提示等によって格段に多くなり，一画面では収まりきらないからである。フレームを利用すれば，学習者が動画説明の流れに従って，マウス等の操作で画面表示をスクロールさせることができる。当初はこの文法解説や発音解説にも後述する字幕ファイルを作成し，動画ファイルとSMILで同期させる計画であったが，学習者のレベルを考え合わせると文字情報は黒板の板書のように静止画面で表示される方が賢明と判断した。

このフランス語文法解説では，それぞれのユニットで説明を受けた文法内容が学習者に定着しているかどうかを確認する自動添削問題が加えられている。図4に見られるように各課の下部には練習問題にアクセスするアイコン（見開きノートの形）を用意し，ここからそれぞれ説明を受けた文法内容を確認する4択自動採点問題[11]に入ることができる（図5）。



フランス語文法解説のメニュー（図4）



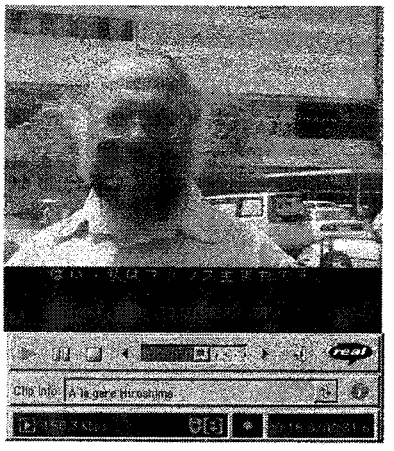
4択自動採点フランス語文法問題（図5）

この自動採点問題は各課に10題設定されている。学習者は各設問の四つの選択肢から答えを一つ選択し，採点ボタンを押せば瞬時に採点が実行され，その結果が得られる。学習履歴や学習者からの質問や感想もサーバ上に残すことができるから，成績管理も可能であり，双方向性という問題に少なからず対応できるものと考える。事実，今までに幾つかの質問や指摘がここから寄せられ，教材内容の改善を行うことができた。

3）聞き取り1　アンテルビュー（全9ユニット）

この教材はネイティブスピーカーによるインタビュー形式の聞き取り練習として製作された。上述したとおり，諸般の理由から当初の計画を断念したため，いわゆる「権威主義的な」会話スキットを利用せざるを得なかった[12]。ここではロケーションやテーマを変えながら，日常的なフランス語コミュニケーションの実際を学んでいく。以下のような9編のユニットのうち，広島市内各所でロケーションが行われた前半の1～4では，簡単な日常会話が取り交わされる。(図6)

1	「広島駅」	名前，国籍，年齢，生まれた場所
2	「路面電車」	仕事，住んでいる場所
3	「原爆ドーム」	天候，ものの名称
4	「広島平和記念公園」	ものの名称，広島や日本の印象
5	「研究室」	研究者の日常生活
6	「映画について」	映画，日本映画の魅力
7	「当世学生気質」	広島大学の学生とその変化
8	「質問」	？
9	「パリのレストラン」	パリでは何を？

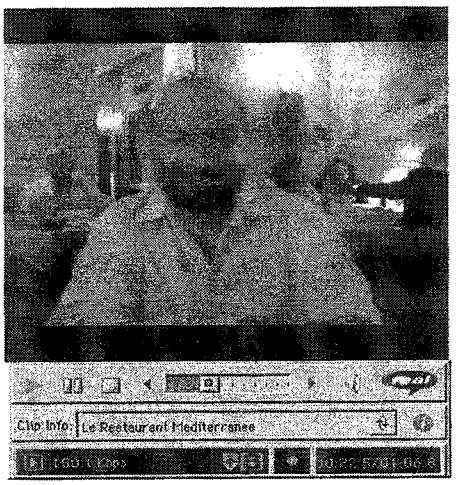


1　広島駅（図6）

5～7はそれぞれのテーマについて自然な速度で意見を述べてもらった。従って4「広島平和記念公園」までと5「研究室」以降では学習難易度が異なる。前者は入門用，後者は初級・中級用の教材と考えるとよいだろう。この7「当世学生気質」まではそれぞれまとまりをもった質問

事項をあらかじめインタビューの相手であるネイティブスピーカー本人にチェックを受けた上で行われたものであるが，8「質問」は相互に全く関連のない質問事項をその場で質問し，それに答えてもらうという形式をとった。これには，敢えてコンテクストを取り除くことで，聞き取る側により高度の聴取能力を要求しようという意図が反映されている。また同時に，筆者がフランス人と日頃会話をして常々感じるとっさの切り返しの妙といったものを学習者に感じ取ってもらいたいとも考えた。その意味でこの8「質問」はフランス文化論的な意味も孕む。

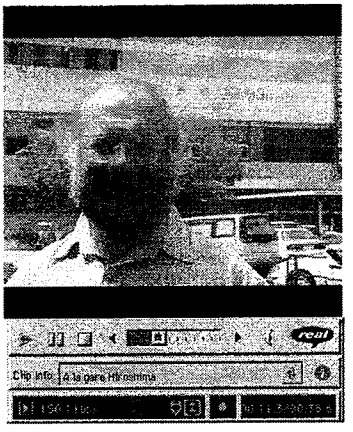
インタビュー内容の最後に9「パリのレストラン」（図7）について少し触れておかなければならない。2001年8月29日から9月2日にかけてフランスのポワチエ大学で開催された「ラブレー・ブーシェ国際学会」Les Grands Jours de Rabelais en Poitou Etat des lieux (1483-1564) Rabelais et Bouchet[13]に参加し終えた筆者は，パリを発つ前夜，この教材製作に協力・出演してくれたレヴィ　アルヴァレス氏に会う機会を得た。この映像はたまたまビデオカメラを持ち合わせた筆者が，カルチエ・ラタンにあるジャン・コクトーJean Cocteau の絵で彩られたレストラン「ラ・メディテラネ」La Méditerranée の夕食でメインが終わり，デザートが運ばれる直前に撮影したものである。台本なしの即興で撮ったことが幸いし，勿論パリのレストランという背景も（更に言えば適度な量の赤ワインも）手伝って，この「パリのレストラン」は教材全体の他のいかなるユニットよりも臨場感に富む「アンテルビュー」となった。このような素材を数多く集め，効果的に教材の中に組み込むことができれば，バーチャル学習はより一層魅力的なものになるに違いない。



9　パリのレストラン（図7）

この「聞き取り1　アンテルビュー」では各ユニットを学習者のレベルに合わせて「字幕なし」,「フランス語テキスト付」,「日本語字幕付」の3パターンを用意した（しかし現在この3パターンを用意してあるのは1「広島駅」のみである）。日本語字幕と動画ファイルの連動にはやはりSMILを使用し，図6のように，動画ファイルとあらかじめ Real Text で作成した字幕用のファイルを同期させることで，初級者の聞き取りの助けを計った。しかしながら，現在の Real Text ではフランス語の特殊文字（é, à, ç 等）は表示できないので，「フランス語字幕付」

パターンの作成は断念し，図８のような「フランス語テキスト付」で対応することにした。このファイル作成には先の「フランス語文法解説」と同じく文字情報が多いことを考慮して，フレーム形式を用いた。



Vous vous appelez comment?
- Je m'appelle Claude Lévi Alvarès

Vous êtes français?
- Oui, je suis français.

Vous avez quel âge?
- J'ai 49 ans.

Vous êtes né en France?
- Oui, je suis né en France.

Dans quelle ville?
- Je suis né à Paris.

フランス語テキスト付（図８）

４）その他の教材

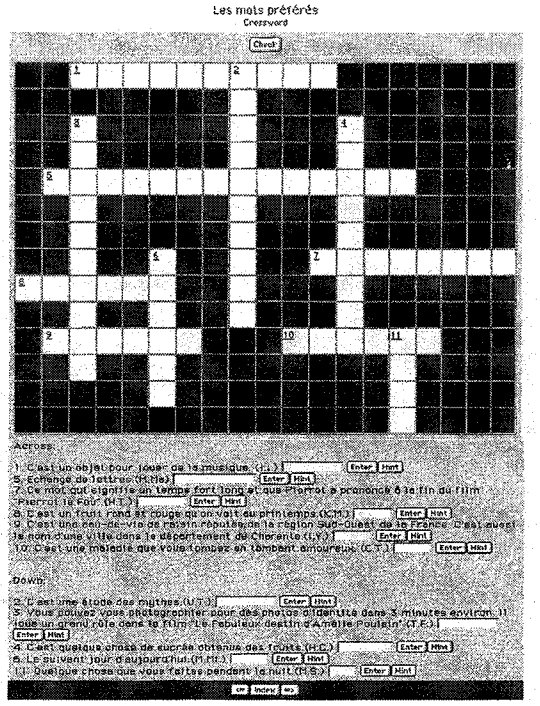
「４）聞き取り２　ディクテ」は長文ディクテ用の教材として以下の５ユニットの製作が準備されている。

「教会」	パリのサント・シャペル Sainte-Chapelle
「大道芸」	パリのヴォージュ広場 Place des Vosges の回廊での東欧系音楽グループの演奏
「田舎生活」	フランス南西部ヴァンデ Vendée 地方の農家
「海の要塞」	映画『冒険者たち』*Les Aventuriers* の舞台フォール・ボワイヤール Fort Boyard
「世界遺産」	11世紀の壁画で有名なサン・サヴァン教会 Abbaye de Saint-Savin

いずれのヴィデオ映像も先に述べた2001年夏の国際学会参加の際に筆者が収集したものである。現在は映像の編集とディクテ用のフランス語文章の作成を行っている。

また，「５）ロワジール・パリとクロスワードパズル」には，同時期に滞在したパリで収集したヴィデオ映像をあるシャンソンのイメージで編集したパリ紹介ビデオ・クリップ「ロワジール・パリ」と，講義で学生と一緒に製作したクロスワードパズル mots croisés「私の好きなことば」（図９）を用意した。前者は著作権上の問題から学内限定とした。曲をリリースするレーベルからは快諾を得たが，日本著作権協会 JASRAC のインタラクティブ配信の問題が解決していないためである[14]。後者のクロスワードパズル製作にはカナダのビクトリア大学で開発された教材製作ツール Hot Potatoes 中の JCross を用いた。クロスワードパズル製作は外国語学習にとっての基本となる単語定義を遊び感覚で学ぶことができるので，毎年二年次の講義で学生への課題としている。製作にあたっては，各学生はテーマを選び，そのテーマに従って10個の単語をフランス語で定義する。テクストチェックは学生間に任せ，教員は介入しない。2002年度の学生は各自

で Hot Potatoes をダウンロードするところから始め，html ファイル生成までが課題となっている。今後は毎年のように学生作成によるクロスワードが増えていく予定である。クロスワードパズルや「ロワジール・パリ」は装飾的な色彩が強いことは否定できないが，このような遊びの要素をある程度取り入れることで，オンライン教材は学習者に学習意欲をかき立てることができると考えられる[15]。



クロスワードパズル mots croisés（図 9）

B．教材のオンライン化

製作した教材をオンライン化する作業であるが，これは今だインターネット環境がアナログモデムや ISDN といった「ナローバンド」対応が主流を占める現状では，配信した動画ファイルは私たちが想定した速度で円滑に再生されることは少ない。広島大学学内から LAN でアクセスしても，混雑時には画像はしばしば止まってしまう。そこで，誰でも，どこからでも，いつでもという原則から，画像クオリティの低下は承知の上で，各ユニットに対して次のような通信速度に応じた三つのビットレートでエンコードした動画ファイルを用意した。（図 4 のメニューを参照）

	ビットレート	画面サイズ
ダイアル・アップ 56K	34Kbps	120×90ピクセル
ISDN	45Kbps	160×120ピクセル
LAN	225Kbps	320×240ピクセル

そして，これらの区別を容易にするため，「ダイアル・アップ56K」を緑，「ISDN」を青，「LAN」を赤のアイコンで全ユニットを統一的に表示して配信した。

4．オンラインフランス語教材の今後

最後に，「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」に残された当面の課題を整理してこの論を閉じたい。まず第一は，残された部分の完成である。「フランス語文法解説と4択練習問題」の残り5課の完成。「聞き取り1　アンテルビュー」の2以降にフランス語テキストと日本語字幕を付し，これらのインタビュー内容に関連するオンライン問題を製作。「聞き取り2　ディクテ」の5ユニットの編集と長文ディクテ用のオンライン記述式採点問題の製作などである。第二に，現在でもメールによる対応は行っているが，学習者とのコミュニケーションをより円滑に行うための装置，例えば最も単純な例として掲示板を設置していくこと。更に，学習者にアクセスし易いページレイアウトを考えることや，遊びの要素を取り込んだインタラクティブな教材の導入も必要であろう。

今回の「バーチャルユニバーシティ推進事業」は2002年3月をもって終了したが，製作したオンライン教材の成果が現れるまでにはある程度の時間がかかるに違いない。そう考えるならば，「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」はこの事業をきっかけにしてその端緒を開いたに過ぎない。これを生かすか殺すかは私たちがここからオンライン教材をどのように膨らまし，学習者がどのように利用していくかが鍵となるはずである。時代は急速な勢いでIT化の方向に進み，私たちの教育分野も例外ではない。現在，既に様々な「バーチャルユニバーシティ」の試みが始動している[16]。しかし，この闇雲に進むバーチャル化の中で忘れてならないことは，冒頭にも述べたようにバーチャルが（そして「バーチャルユニバーシティ」はそこまでのことを求められていないかもしれないが）たとえ虚構の信号から構成されても「事実上は現実と同様の効果をもつ」のであるなら，この仮想世界においても人間的なコミニュケーションが重視されなければならないということである[17]。この人間的なコミュニケーションがなければ，私たちはコンピューターという機械に操られているに過ぎない。おそらく，このコミュニケーションは学習の評価や質問等のレスポンスの問題ばかりではなく，学習者の要望を積極的に取り入れることで新たな教材の進化を目指すことにもつながるはずである。そのようにしてオンライン教材は絶えず「蓄積」accumulatif されなければならない[18]。

注

1）岩崎克己，「広島大学バーチャルユニバーシティ：オンラインドイツ語講座の構築」，『広島外国語教育研究』5号，広島大学情報メディア教育研究センター外国語教育研究系，2002年，pp.77-85.

2）「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」のURLはhttp://flare.media.hiroshima-u.ac.jp/french/index.htmlである。

3）西垣通，『聖なるヴァーチャル・リアリティ　情報システム社会論』，岩波書店，1995年，p.2.

4）服部桂，『人工現実感の世界』，工業調査会，1991年，p.23.

5）このシステムについては，同上書「第1章　人工現実感とは何か？」でその成立の経緯が詳述されている。

6）私たちの「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」は「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル」Université virtuelle（＝バーチャルユニバーシティ）という言葉を使いつつも，「大学」というトータルな意味ではなく，あくまでもフランス語「講座」程度の意味であることを断っておかねばならない。

7）田中規久雄，「大学教育とインターネット　－文教政策にみるその展望－」，『大阪大学情報処理教育センター広報』16号，1999 http://www.law.osaka-u.ac.jp/~kikuo/article/jokyo16/ (le 5 décembre 2002) この論文は大学審議会等の各種審議会の議論を踏まえた上で，大学教育におけるインターネットの果たす役割を考察している。

8）西垣通，前掲書，p.67.

9）このインタビュー形式は，またもや映画からで恐縮であるが，ジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard 監督の『勝手にしやがれ』*A bout de souffle* のインタビューシーンや，『書を捨てよ町へ出よう』等に見られる寺山修司のインタビュー手法から着想を得た。

10）この作成には広島大学総合科学部制作科学講座の村瀬延哉先生（フランス語文法解説と4択練習問題）と言語文化講座の井口容子先生（フランス語の綴り字と発音），広島大学総合科学部の非常勤講師戸板律子先生（フランス語文法解説と4択練習問題），広島大学総合科学部外国語コースの学生（土井裕子さん，柳生和宏君，山城理絵さん）そして広島大学総合科学部広域文化講座のクロード・レヴィ　アルヴァレス先生の協力を得た。とりわけ，楽しき同僚であり，友人でもあるレヴィ　アルヴァレス氏の理解と協力がなければこの教材は日の目をみることはなかったであろう。ここに深く感謝したい。

　また，現在編集中の教材（聞き取り2　ディクテ「田舎生活」）に快く出演して下さった青山学院大学文学部の平野隆文氏にも合わせて謝意を表したい。

11）この4択自動採点ドリルは広島大学情報メディア教育研究センターの岩崎克己氏が作成したものを借用させてもらった。詳しくは岩崎克己，「初修外国語授業支援のための自習用オンライン自動採点ドリル」『広島外国語教育研究』2号，広島大学情報メディア教育研究センター外国語教育研究系，1999年，pp.23-37. 岩崎氏にはこのドリルの借用をはじめ，「ユニヴェルシテ・ヴィルチュエル・フランセーズ」製作にあたり数々の助言をいただいた。ここであらためてお礼を申し上げる。

12）しかし，この聞き取り教材を注意深く学習していけば，当初の計画の痕跡を認めることができるはずである。

13）この国際学会のプログラムと簡単な滞在日記を私のホームページに掲載してあるので，興味のある方は http://home.hiroshima-u.ac.jp/hirate/etudes.html をご覧いただきたい。なお，この国際学会の渡航は「バーチャルユニバーシティ推進事業」から費用負担されていないことを念の為に付け加えておく。

14）インタラクティブ配信についてはJASRACの「ネットワーク課」のURL（http://www.jasrac.or.jp/network/index.html）を参照。

15）遊び感覚でフランス語を学習できる例として，CD-ROM教材 *Salut, ça va?* Didier, 1997 の一連の教材を考えてもらいたい。

16）筒井洋一，「バーチャルユニバーシティーはあなたの可能性を広げる」，杉田米行編『人文社会科学とコンピュータ』所収（第9章），成文社，2001年，pp.142-161. ここでは大学等による様々なバーチャルユニバーシティーの試みが紹介されているが，その具体的な教材内容まで

は詳しく触れられてはいない。

17) 西垣通，前掲書，p.80.

18) 私たちは絶えず飛び続けなければならないのだろうか。できればそれは避けたい。以上述べたような教材作成を，限られた物理的条件のもとで続けていくことは相当なエネルギーを要するからだ。何よりもまず，筆者の専門はフランス16世紀文学であり，はっきり言えばこのオンライン教材開発は「余技」である。しかし，「余技」でありながらこの世界に関わり続けるのは，他に遅れを取るまいといった後ろ向きの気持ちではなく，このCALLに何らかの可能性を見出しているからである。だからこそ，多くの犠牲を払いながらも，この教材作成に携わっているのだ。この代価に値する正当な評価が行われることを切に望む。

RÉSUMÉ

«Université virtuelle française» à l'Université de Hiroshima
—— Essai de créer les cours de la langue française reliés à Internet ——

HIRATE Tomohiko
Faculté des arts et des sciences intégrés
à l'Université de Hiroshima

Nous avons installé un site «Université virtuelle française» à l'Université de Hiroshima. Ce site a pour but l'enseignement de la langue française par Internet. Dans ce contexte, le mot «Université virtuelle» n'indique pas la simulation d'une université réelle par des images de synthèse tridimensionnelles, mais la possibilité d'accéder n'importe quand, depuis n'importe où et aussi souvent qu'on le souhaite sur le site grâce au WEB.

Notre site se compose actuellement de quatre cours caractérisés par un enregistrement vidéo.

1 Des explications de la relation entre l'orthographe et la prononciation françaises (24 unités)
2 Des explications de la grammaire et des exercices avec correction automatique (5 leçons 23 unités)
3 Une série d'interviews en français avec un Français divisés en deux parties: un modèle de présentation de soi et des interrogations sur lui (9 unités)
4 Deux séquences récréatives: un montage vidéo de Paris monté à l'unisson d'une chanson française et les mots croisés fabriqués par les étudiants

L'originalité de ces cours tient aux interviews qui, réalisées au centre de la ville de Hiroshima (Dôme de bombe Atomique, gare de Hiroshima, etc.) et à l'Université de Hiroshima (et aussi dans un restaurant de Paris), peuvent diffuser des renseignements sur Hiroshima en français.

Aux explications et interviews, on a synchronisé des textes et des images-sons en vidéo en utilisant le SMIL (Synchronized Multimedia Integrated Language) pour émettre des fichiers du type REAL sur Internet. Pour qu'autant d'utilisateurs que possible puissent utiliser notre site, nous avons prévu trois sortes d'accès de vitesse (34 Kbps pour le 56K du téléphone, 45 Kbps pour ISDN, 225Kbps pour LAN).

Si la réciprocité est considérée comme une dimension essentielle dans l'enseignement du français par Internet, nous ne devons pas oublier que ce cours est destiné non seulement à l'apprentissage d'une langue étrangère mais également à la communication «humaine».